
僕の親は無限の欲望

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の親は無限の欲望

【Nコード】

N2357BA

【作者名】

楚良

【あらすじ】

気が付いたら目の前には神様が！

主人公はなんでか前世の記憶を持たぬまま転生！

転生先はまさかのスカリエッティのアジト！？

他の転生者がいる中、原作知識どころか前世の記憶がない主人公はどうするのか！？

プロローグ？（前書き）

どうも、楚良です。

頑張って完結まで持ってい行けるよう頑張ります。

ちなみに転生ものの初挑戦です。

応援してくれたらうれしいです。

プロローグ？

「突然だがお主には転生してもう」

「はあ？」

少年が気がつくところそこは一面真っ白。
水平線の向こうまでが真っ白で、障害物はおろか、雲も太陽も何もない空間だった。

そして少年の目の前には無駄に髭の長い老人。
一瞬、頭打っておかしくなったか？と思ってしまいが、この老人は限りなく正常だ。

「おじいさん、何言ってるの？もしかしておばあちゃんが死んだから狂って」

「すまんがわしは正常じゃよ。話を進めたいんじゃないか？」

「ダメって言ったら？」

「地獄に墜とす」

「サーイエッサー！」

「老人の説明開始」

この老人はなんと神という存在だった。
少年は神に少しだけだが喧嘩を売っていたのだ。

しかし、この神様は本当に優しい。

そんなことをなかったかのように接してくれた。

しかも人の心が読めるらしく、少年の考えたことは筒抜け。

少年はビククリしていたが、そこまで驚かれなかったことに神様は少し落ち込んだとか。

それと転生させてもらえる理由が気まぐれらしい。

適当に選んだのがこの少年ということだ。

「という訳で好きな望みを言え。何でもかなえてやるぞ」

「その前にどの世界に転生するの？」

「そういえば言っていなかったの。『リリカルなのは』の世界じゃ」

「・・・マジ？」

「大マジじゃ」

『魔法少女リリカルなのは』

二次創作などではよく見かけたりする。

各言つこの少年も結構好きなアニメでもあるのだ。

そこで少年はあることを思いつく。

神様が何でもかなえてくれると言つことなので早速頼んだ。

「それと、スカリエツティ側」

「良いじゃろう。して、他には？」

「そして最後に」

「前世の記憶を消してくれ。原作知識も全部」

「・・・お主、本気で言っておるのか？」

「おう、二度目の人生だ。前世の記憶に邪魔されたら詰まんないだろ？」

「はっはっはっ！！お主のような人間は始めてじゃ！よし、これも何かの縁。特別特典を授けよう！」

「いらないけど、一応受け取っておくよ」

「それと、最後に忠告じゃ。お主の他にも転生者はおる。気を付けるのじゃぞ」

「・・・記憶消すんだからそれ意味なくね？」

「つべこべ言わんで、行つて来い」

そう言うと、少年の足元が丸く、黒くなる。

さらに言つと脚が地面についている感覚がなくなった。
つまりは

「落ちんのかよーっ!!!!!!」

プロローグ？（後書き）

次回はキャラ紹介（たぶん
その次から本編となります。

キャラ紹介

名前：アイク（人造魔導師なので名前のみ）

年齢：10歳

性別：男

容姿：黒髪、金色の瞳

性格：家族思い

スカリエッツィだけ異常程と言っているほど大切にしている

術式：古代ベルカ式

備考：オリ主でも何でもないとただの転生者。

前世の記憶を消してもらったという暴挙に出たため神様のお気に入りになったらしく、特別特典で『風』との変換資質と『戦いの才能』を貰うが転生前の記憶がないので知らない。しかしナンバーズ達の訓練中変換資質を使えることに気づく。

転生先の条件を「スカリエッツィ側」としか言っていないので突然アジトの目の前にいたとかではなくスカリエッツィの駒として作られた人造魔導師になって転生。

そのため本人はスカリエッツィを「父さん」と呼んでいる。

魔力光は何が起きたのかわからないが無色透明。

基本、魔法陣を展開すると白色となる。

ユニゾンデバイスとユニゾンすると魔力光が無色透明なので、シグ

ナムとアギト、はやてとリインと言ったペアよりも融合率が高く、融合機を選ばない体質。だがその肝心の融合機がないのでその体質は無意味なものとなっている。

デバイスはスカリエッティが作ったインテリジェントデバイス『ラグネル』。通常のシュベルト（Schwert）フォルム、速さに特化した逆手二刀流のタキオン（tachyon）フォルム、一撃の威力に長けた超巨大剣ザンバー（zanber）フォルムの3種類。

カートリッジ内蔵型でレヴァンティンと似た構造。無口だが物凄く高性能なデバイス。

バリアジャケットを着ると必ず白い鉢巻を付ける。メインカラーが白の騎士甲冑。スピード重視なため籠手と胴当ては付けていない。

第01話 動く転生者達

アイクの目が覚めた時は、何か得体のしれないポッドの中だった。意識がはつきりしないまま見えたのは、紫色の髪をした男性。

広域次元犯罪者でもあり、マッドサイエンティストとも呼ばれる科学者『ジェイル・スカリエッティ』

当初、スカリエッティはアイクに興味などなかった。

所詮は後の祭りが必要になる駒。それぐらいにしかとらえていなかった。

しかし、その考えはアイクが成長し、7歳のころにポッドから出た後が変わった。

まず一つ目にアイクはスカリエッティのことを『父さん』、つまりは父親としていた。育てるのが面倒だったスカリエッティは自分の娘たち ナンバーズにそれを押し付けるが、この時から少しずつ興味を示していた。

二つ目に、何度も何度も「手伝いたい」と言ってきたこと。

正直、スカリエッティにとっては研究の邪魔でしかなかった。

だが一度手伝わせてみると、アイクは驚くほど熱心に手伝ったのだ。親に認められたいという子供の性質なのか。それはわからなかったが、スカリエッティはアイクに強く興味を示していくようになり、デバイスを作成するなど、父親らしい行動に出た。

三つ目に料理を始めたこと。

ナンバーズはもちろん、スカリエッティも基本栄養食で済ませている。

固形ブロック状のものや、ゼリー状のもの。

しかし、アイクはそれを見た途端何かに火がついた。

「そんなんじゃ体に悪い！」と言いだし、セインと街に出て買い物に行き、帰って来るやいなや料理本を片手に料理を開始。

悪戦苦闘するもようやく出来上がった料理はとてもおいしかった。

これはきつと、家族を大切にしたいというアイクなりの考えなのかもしれない。戦闘機人といえど、人は人。体が壊れては大変だと思っただろう。

そして四つ目。

アイクの戦いに対しての適正度だった。

初戦闘でトーレに先手を打つと言う偉業を成し遂げた。

持っていたインテリジェントデバイス『ラグネル』の特性を瞬時に理解し、フォルムチェンジを駆使してトーレを翻弄。勝ちはしなかったものの、それは褒められるものだった。

さらに後の訓練では『風』の変換資質を見せつけ、スカリエッティのアイクへの興味がより強くなる。

応用力も高く、閃きも子どもならでわで斬新。そのおかげなのか、アイクはまさし人造魔導師らしく、戦うために生まれてきたようにも感じられた。

「アイク。少し頼みたいことがあるんだが、いいかい？」

月日は経ち、3年。

アイクは今10歳となった。

他の転生者に襲われることもなく、平凡かつ平和にナンバーズ達と日々を楽しく過ごしていた。

そして先ほど、父親であるスカリエッティに頼みごとを言われた。内容はまだ知られていないがアイクは、父親の頼み、ということ

で快く引き受けよう。

その頼みごとの内容とは、リニアールにあるレリックの回収。少し前から集めている事を知ったアイクは、手伝いたいと思った。

そしてようやく出番が回ってきたのだ。うれしくないことはない。

そしてこれは原作の一部だ。

時空管理局機動六課の初任務。

アイクは知らないが、必ずリニアールで接触するだろう。

さらに管理局、もっと言えば六課に所属している転生者とも鉢合わせだ。

原作にいないアイクを見れば、すぐに転生者だとばれるはずだ。

そうなれば命を狙われる危険性も高いだろう。

しかし、アイクには前世の記憶がない。

転生者かどうかと聞かれれば「知らない」と返すことしかできないため、運が良ければ並行世界の住人として見られる。

だが、そうなる場合は限りなく少ないだろう。

そう都合よく勘違いされるなど、夢の中やアニメの世界だけだ。

「わかった、行ってくるよ」

アイクはそんな原作なんて知らず、リニアールに向かう。

自身のデバイスであるラグネルを待機状態にし首から下げ、アジトを出て行った。

s i d e o u t

場所は変わって機動六課。

ここに、2人の転生者がいた。

1人目の名前はシン・ミッツリ。

母親が地球出身、父親がミッド出身のハーフ。

テンプレで、転生前の容姿と同じく黒髪、黒眼。

自らをオリ主と思わず、ただ原作を守りながら原作キャラ達と楽しく過ごそうという考えで介入した転生者だ。

魔力ランクAA、魔法の才能を持ち、無印時代から原作に介入。なのは達との関係もそれなり。ハーレムなんて目指さずハッピーエンドを目的としてる。

2人目の名前は衛宮健斗。

銀髪、赤と緑のオッドアイな自称オリ主。

親はおらず、親戚に引き取られて学校に通っていた。

シンとは違い、ハーレムを目指す変態転生者。

魔力ランクニアS、レアスキルとして『無限の剣製』を持ち、これまたシンと同じように無印時代から介入。ニコポ、ナデポは神様にダメと言われたらしい。

根は物凄く善人なのだが、目的のせいであまりよく見られていない。

この2人、無印時代、A・Sでは敵対していた。

シンはフェイト側、管理局側。

健斗はなのは側、ヴォルケン側。

ヴォルケنزには最初、全く信用されていなかったが、いろいろあったため協力できた。そして中学時代を経てSTSでは同僚となった。

当初、というか今もだが健斗はシンをあまり良く思っていない。

オリ主の邪魔をするモブキャラと見ていたのに、今では自分よりも原作組、特にフェイトと仲がいい。全員にフラグを建てたはず、と思っているがそんなことは全くなかったのだ。

そして今日はついに原作での六課初任務。

原作知識のある2人は少しばかりいつもと違い、そわそわしていた。

今までイレギュラーは特になかった。

闇の欠片事件が起きたが、その後は特に何もなし。

15歳の時のミッドの火災事件の時も特に何かあるわけではなかった。

しかし、この原作が始まるとどうなるかわからない。

良く似た並行世界であることは神様から言われわかっていたが、特に違う部分が見当たらなかった。つまりはSTSから何か起きると2人は踏んでいたのだ。

「このアラートって！」

「第一級警戒態勢!？」

六課の隊舎に響くアラート。

初任務開始の合図ともいえるアラートを聞くと、シンはより一層気合を入れる。イレギュラーがあるかもしれない。

もしそんなことがあれば原作と同じに行くかわからなくなる。

その顔を、横にいたなのは違う意味で理解する。新人たちいいところを見せよう、と思っているのだらうと勘違いしたらしい。

「全員、初任務だ。気合入れろよ」

『はいっ!!--!』

第01話 動く転生者達（後書き）

次回、早速戦闘です。

展開速いですけど気にしないでくれると嬉しいです。

第02話 一撃必殺

今回の任務では、前線のFWメンバーとスターズ分隊隊長であるなのはとその補佐の健斗、ライトニング分隊隊長であるフェイトとその補佐のシン。それに付け加えて観戦担当のラインフォース？の合計9人で行う。

空を飛べる隊長2人と補佐2人はガジェットドローン？型（以降ガジェット）の迎撃に当り、残ったFWメンバーはリアルールのガジェットを掃討しながらレリックの回収となった。

ちなみにフェイトは違う場所から飛んで来るらしい。

六課へ移動中に初任務のアラートが鳴ったため、近くのパーキングエリアに車を止めなければならないという、少し面倒なことに。しかし、これも仕事。あまり文句は言ってられない。

他の8人は、ヴァイス・グランセニック陸曹が操るヘリに乗り込み、現場へ向かっている。ヘリの中では作戦内容の確認。

不安そうな少女キャロ・ル・ルシエをなのはが落ちつかせ、安心させた後、なのは、健斗、シンの3人はヘリから飛び降りた。

正直、これはトラウマ物だろう。

なんの躊躇もなく1人、また1人と続いて3人も落ちて行くのだ。空中でセットアップするという技を見せるが、はっきり言って良い例ではないだろう。もしセットアップが間に合わなかったら死に直結するのだ。それなら最初からセットアップして降りてほしい。

だが、今回は幸運にもそんなことはなく、無事3人は空へ飛び立った。

途中フェイトと合流し、大量のガジェットを迎え撃つ。

残ったリインはしっかりヘリ内でセットアップし、FWメンバーはなのは達の真似をして2人づつ飛び降り、空中でセットアップした。これまた幸運なことにしっかりと着地で来たが、今後はやめてほしい限りだ。

「それでは作戦開始ですっ！」

『はいっ！』

「なに、この傷・・・」

FWのリーダー格であるティアナは、自分の足元にある不自然な傷に気がついた。

s i d e o u t

「来た・・・！」

森の中に隠れているアイクは、待っていた。

時間としては六課側が来る少し前。細かく言えばFWメンバーが飛び乗る前だ。

高速で走るリニアレールを目視で来たことを確認すると、飛行魔法でレールにそって飛びながら待った。そしてリニアレールと接触すると同時に持ち前のデバイス『ラグネル』をシュベルトフォルムにし、突き刺す。

ギイイイイツツ！！！ ガキンツ！！

風に自分の体が飛ばされながら、無理やり姿勢を保つ。

完全に体が慣れるのを確認すると、側面の窓を蹴破りながら中へ侵入する。そこはもはやガジェット？型の巣窟と化していた。

「レリックの場所、どこだっけ？」

『They are the seventh vehicles from here.』

（ここから七両目の車両です）

「ん、りょーかい」

ガジェットは味方。

なので気にせずすたすたと歩いていく。

いろいろとコードやケーブルが邪魔で転びそうになる。

そんなこんなで、何事もなく五両目に到着した時だった。

「あの、その君！止まって！」

「っ？誰？侵入者？」

突然後ろから声をかけられ、振り返る。

そこには青いショートヘアに、アイクと同じような白い鉢巻。

右腕に黒いナックル、脚にローラーを装備した15歳前後の少女スバルがいた。

アイクはすぐに警戒する。

このリニアレールは親であるスカリエッティから、ガジェットを使

って暴走させた、と情報を貰っていた。こんな暴走特急に乗り込むのは相当な物好きか、侵入者のどちらかだ。

当然、アイクは後者の方を考える。

10歳という若すぎる年齢ではあるが、そのくらい用意に考えられる。

そしてやることは当然決まっていた。

「逃げるが勝ち！」

「あ、ちょっと！待ちなさい！！」

ラグネルで天井をぶち破り、逃走。

今のところ、最優先事項は戦闘ではなくレリックの回収だ。

しっかり覚えていたアイクはスバルをスルーし、七両目に急ぐ。

途中、空を見るとなんだか騒がしかった。

一応何かあったと時のためにガジェット？型を大量投入したらしいので、たぶんそれとスバルの仲間たちが戦っているのだろうと判断。これもやはりスルーすることにした。

「ゲットッ さ、これをさっさとアジトに転移転移っ」と

何事もなく、あっさりとレリックを回収できたアイク。

しかし、このまま無事終わるかと思いきや、そんなことはなかった。

「させないわよ」

カチャッ

再び背中から声が聞こえ、今度は銃を突きつけられた。

また侵入者？と思っていながら振り返れないでいるアイクだったが、失敗だった。

それはもうすでにレリックを持っていることだ。

もし持たずに置いてある状態であれば、相手がレリックをとろうとしたタイミングで蹴散らして奪うことができるが、運の悪いことにすでに手の中。

反撃も出来ないまま、アイクの手の中からレリックの入ったボックスは姿を消してしまった。

しかし、アイクもそこまでやられっぱなしではない。

両手がガラ空き、相手は両手いっぱい。こんな状態で迎撃なんて出来るだろうか。もしできたとしても、すぐに敗戦を期すだろう。なのでアイクはすぐさま行動に出る。

一瞬で振り返り、オレンジ色の髪をした少女の手の中にあるレリックの入ったボックスをサマーソルトで蹴りあげ、自分が開けた穴の外へと出すと自分も大きくジャンプし同時に逃げ出す。だが、外に出ると状況はさらに悪化した。

レリックをしっかりと確保はしたが、目の前には先ほどの青髪の少女スバルと、さらに増援か赤髪の自分と同年ぐらいの少年と、ピンク色の髪をした少女と白い竜。はつきり言って戦力差は絶望的だった。

「・・・にいい」

『？』

「ラゲネル。ザンバー行くよ」

『yes・zamber form.』

にやりと、面白いと言いたげな笑顔を見せたと思うと、アイクは足元にレリックを置いたまま立ちあがった。

自分のデバイスを高々と掲げ、カートリッジを1発、2発とロードしていき、合計3発のカートリッジを排出すると同時に、アイクの剣の形が変化する。

柄は長く、FW達を知る隊長達の杖のように。

刀身は薄く、広く、長く、堅く、鋭く。それこそ、このリニアレールを縦に一刀両断できそうなほど大きくなった。

しかし、こんな狭い空間でそんな大きなものを振ることはできない。そんな油断が、FW達の今回の敗因となる。

「ぶったぎれっ!!」

ガキインツッ!!!

壁を斬りながら、大きさからしてあり得ないほど速い剣速で、横に一刀両断。非殺傷設定だが、その最強といってもいいほどの一撃は、アイク後ろにいたオレンジ色の髪をした少女ティアナを除いた3人と一匹をいとも簡単に谷底へ落とすことができた。剣を元の形に戻すや否やアイクは振り返り、呆然としているティアナも谷底へ蹴り落とす。

下を確認すると、先ほどの大きな白い竜が小さい2人を助け、スバルは自力で足場を作り助かっていた。先ほど落ちたティアナは白い竜に背中にちょうど良くダイブ。外傷は全員、強度打撲程度だろうか。アイクが本気じゃなかったことに感謝するべきだろう。しかし今度は

「お前、転生者か？」

銀髪オッドアイな男が空から現れた。

第02話 一撃必殺（後書き）

次回も戦闘描写。

自称才子主vs剣闘王（自称）です。

第03話 逮捕

機動六課スターズ分隊隊長補佐、衛宮健斗は転生者だ。

今回の初任務で必ずイレギュラーが起きる。そう考えたいて健斗は戦闘中の途中、ちよくちよくリニアレルの方を見ていた。そしてそれが功を奏したか、予想は的中。原作にはない状況が出来上がっていた。

リニアレルの上で堂々と超巨大な大剣をぶんまわしている白い鉢巻を付けたエリオやキャロと同世代の黒髪の少年。彼はいつも簡単に、ことごとくFWメンバーに実力の差を見せつけ、全員を谷底に落としていた。それはあの少年が転生者であるということを証明するには十分。健斗はなのに言葉を残し、すぐさま直行。そしてその少年の元まで行くところ聞いた。

「お前、転生者か？」

単刀直入な質問。

普通、転生者かと聞かれると「知らない」と答えるだろうが、それを知っている人間、あるいはそれである人間であるといふ「違う」と答えてしまう。正直、これはどうこたえても関係ないのだ。例えば演技でやり過ぎそうとしてもいずればばれてるだろう。これはそんなひっかけな質問だ。

「????」

しかしアイクは答えない。

それどころか顔が疑問の表情へと変わっていた。まるで『転生者』なんて単語を本当に知らない様に、そして純粹に知りたいと言う意

図で質問を返した「転生者って何？」と。

だが健斗は無言だった。

いや、無言を突き通すしかなかった。この状況で自分から転生者だと言えば、相手が転生者だった時に自分の命を狙ってくる。そう考えていた健斗はある考えに達する。殺されるならば先に殺してしまえばいいと。

そう思ったらすでに行動に出ていた。

レアスキルとして貰った『無限の剣製』の能力で作りだした愛用の夫婦剣『干将』『獏耶』を手にアイクを殺そうと不意打ちをしかけた。

「おっと」

しかし、その不意打ちは回避される。

アイクは訓練を基本トーレとの一対一で行っている。しかもちゃっかりISを使ってきたりとお構いなしの本気。なので高速戦闘には自信があるのだ。逆に言うと、通常の攻撃速度は少しばかり遅く感じると言うこと。だから健斗の不意打ちを紙一重で、最小限の動きだけで避け、距離をとることができた。

ここで健斗は失敗を犯した。

今回はレリック回収の任務がある。殺人衝動に駆られ、それを忘れてしまっていたのだ。先ほどの攻撃は殺すためではなく、レリックを奪取するためにすればよかったと後悔していた。

しかし時はすでに遅し。

アイクは協力者であるルーテシアに教えてもらった転移魔法の応用、簡易版の転送魔法を使い、レリックをアジトに転送してしまってい

た。これでアイクのいるスカリエツティ側としては任務完了。健斗たち六課側にとっては任務失敗となった。

「お前、レリックをどこへやった」

「知らないお兄さんに教える必要はあるのかな？その前に、質問。まだ答えてもらってないんだけど」

「それはこっちの台詞だ」

「あ、そつか。えっと、転生者だったよね？僕は『転生者』なんて知らないし、たぶんだけどそれじゃないと思うよ。僕は剣闘王アイク！お兄さんは？」

「・・・時空管理局遺失物管理課、機動六課スターズ分隊隊長補佐。衛宮健斗一等空尉だ」

「めんどいからお兄さんでいいや」

「なあっ！？」

せつかくご丁寧に自己紹介をしたのに、めんどい、の一言で全部片づけられてしまった。キレた健斗は、今度は本気で不意打ちにかかる。

だがしかし

ガキンツ！！

健斗の本気の不意打ちは、見事に防がれた。

だが、肝心の防いでいる武器の姿が確認できない。いや、不可視にしてあり、確認させないのだ。どうしてこんなことになっているの

か。それはアイクの『風』の変換資質の応用技のおかげだ。

大気を圧縮させ、光を屈折させる。

元々、攻撃に転用できないかどうか試行錯誤していたところからこの魔法は始まった。剣に纏わせ、放てば強力な一撃になるんじゃないか。そう思いとりあえず圧縮していたら訓練相手のトーレが気付き、風を纏っている剣の一部が不可視になっていてのを発見したのだ。それからアイクはこの魔法を使えるようにし、常時発動するようになり、以降この技を『インビジブル・エア』と呼ぶようになった。

「はあっ!!」

武器をはじき、反撃の一撃。

しかしそれは大きくバックステップで空中に回避されてしまった。

だが、武器自体が見えないということはリーチがわからないと同じ。健斗の判断は正しかった。もし小さくバックステップしていれば攻撃を食らっていたかもしれないからだ。しかし、同時に懐へ入ることを警戒しなくてはいけなくなった。

アイクにとって、この状況は有利以外の何物でもない。クロスレンジでは不可視にしたラグネルの攻撃を防ぐことはできても避けることは難しいはず。だからこそ距離をとり、ロングレンジの戦いに持ち込もうとするがそれは逆にやってはいけないことだ。相手の距離がどれだけ離れていようと、ザンバーフォームでの高速一刀両断が使える。タイムラグがあるが、今のアイクと健斗の距離を考えると関係がないと考えられた。

しかし、健斗は一つだけ活路を見つけた。

なのはの様な砲撃、はやての様な広域魔法といった遠距離から相手を倒すことのできる唯一の方法。それは投影した宝具を変形させ、撃ち放つ弓矢だった。

「I am the bone of my sword」

（我が 骨子は 捻じれ 狂う）

両手の干将、猊耶を消し、左手に弓を、右手に捻じれた短剣を投影する。形を変えた短剣は矢となり、細く、長くなる。そしてそれを構え

「偽・螺旋剣」！！
カラドボルグ

放った。

貫通力のあるそれは防御をいとも簡単に貫くだろう。それを知らないアイクは必ず防御する。そう考えていたが、実際にとったアイクの行動に健斗は笑った。

アイクの取った行動は”構え”。

防御して貫かれるよりも、回避しきれないことよりも、もっとも確実と言えるそれは攻撃の構え。高速で迫りくる矢に対し、アイクは攻撃を仕掛けた。

「ヴァイオレント」

『Explosion』

「ウィンドッッ！！」

アイクの剣から放たれたのは巨大な竜巻の様な暴風。

一瞬だけ、ラグネルの姿があらわになったが、それはすぐに風で覆われ、再び不可視になる。

そして放たれた巨大な暴風は健斗の矢とぶつかり、矢の威力をじわじわと削り取っていった。相殺、とまでは行かずとも、威力は最初の十分の一程度、速さももう遅いと言えなかった。アイクはそれを、いとも簡単に。それこそ木の枝を折るように飛んできた矢を叩き斬る。残ったのは砕けた矢を作っていた魔力だけだった。

「ふう・・・ラグネル！」

「tachyon form.」

再び不可視の剣からカートリッジが排出される。

手の内から剣を放したと思えば、今度は両手を広げ、再び握る。動作からして、確実に双剣。アイクはしっかりと握れたのを確認すると、健斗に突っ込んできた。

ガキンッ！

再び投影した干将、猊耶で防御する健斗。

この距離で分かったことは、アイクの持つ双剣は逆手持ちだと言うこと。しかし、そんなことを知ったからといって不可視の剣のリーチはわからない。しかも手数が多く、速度も速い双剣となると恐怖以外の何物でもなかった。

健斗は、焦っていた。

物語の主人公であるこのオリ主が押されている。こんな転生者かどうかもわからない子供に負けるなんて、許されるはずがなかった。どうにかしてこの状況をひっくり返せないかと、試行錯誤していた

が、その油断がアイクを勝利に導いた。

「疾風」

防御していた両腕を弾き、アイクの右腕がすぐ動く。

風と魔力を纏った渾身の一撃が、クリーンヒットする。

「双陣ッ!!」

ザンッ!!

魔力ダメージでノックアウトは狙えなかったが、まだ攻撃は続く。両腕の攻撃は間に合わずとも、脚の攻撃なら間に合う。アイクはがらあきの健斗の鳩尾に、体を回転させながら蹴りを叩きこんだ。

「あ、やりすぎちゃったかな？まあ、僕の勝ちには変わらないけど」

「いいや、君の負けだよ」

「え」

バシッ

急にアイクの体が縛られる感覚を覚える。

体を見ると、そこには黄色の魔力光をしたバインド。

本日3度目の声がした後ろに振り返ると、そこには絶世の金髪美人がいた。

「君を公務執務妨害で逮捕します」

「あ、はい（きれいな人だなあ・・・）」

アイクはいとも簡単に捕まってしまった。

第03話 逮捕（後書き）

次回は、未定？

機動六課に連れて行かれる、もしくはその場から逃走するかのどちらかだと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2357ba/>

僕の親は無限の欲望

2012年1月8日21時47分発行